

門前町のパターンにミュージアムロードを当てはめることで得られるアイデア

副題 二人のコウズイが見たビジョン

神社や、寺院があるから、そこに参拝する人の流れができ、休憩場所としての食事処や、宿ができ、縁日での市場ができ、門前町は時間をかけて発展し、今でもその勢いを保っています。今回その門前町を参考にしていかに人の動きを作るハードを作るか提案してみたい。

伊勢神宮には、約5キロ離れて外宮と内宮があり、その間には、おかげ横丁という旅の楽しみである、食やお土産の買い物の場所があります。

神社の主人公が神さまとして、おかげ横丁の主人公は誰でしょうか。それは、参拝者自身です。門前町は、必ず、自分自身が主役になれる場所がないと物足りない空間になってしまいます。

神戸のミュージアムロードには民間での食事処や、物販の店があるではないか。

だから、商業には、行政が出来るだけタッチしないという姿勢では、町を栄えさせるという結果には到達しにくいのではないかと私は考えます。道路や広場の整備だけでは来た人が主人公になれるとは、考えにくいです。

縁日の市を参考に行政が市場を提供する現代の言葉で表現するならば、イベントスペースを作るべきだと思います。

例を挙げると、関西の人の集まるイベントとして、年三回の京都の竹田のパルスプラザで開催されるアンティークフェア。

天満橋の OMM ビルや、京都の都メッセで開催される石不思議展（鉱物、化石の即売会）ポートアイランドで開催される国際宝飾展など人気の企画は見るだけでない参加型のイベントです。

イベント会場を作れば、個人が主役になっての経済活動が広がっていきます。イベントの主催者から使用料を得ることで、施設の維持費にすることができます。

次に、同じ施設に納骨堂を作るアイデアです。

近年、立地の良い場所に納骨堂を設けると、人気があることをご存じでしょうか。

納骨堂を併設することで、管理費をいただきながら、人の流れを生み出すことができます。参拝する人が、美術館のイベントのついでに、納骨堂にも足を延ばしてくれることを期待することができるのです。逆にお参りのついでに美術館もあり得ます。

さらに、この施設の中に美術館を仕込む、3層構造のハードを設けることで、美術館の運営資金を賄うというアイデアです。

つまり、イベントスペース+納骨堂+美術館ということです。

お寺と美術（宗教と美術）という関係性を現代にも活用するというアイデアです。人の心に沿った形が永く栄えるポイントであることは、門前町の魅力を洗い出していけば、同じようなポイントが浮かびあがってきます。

近年都市部では、お墓の用地が不足している解決策の一つになると思います。突飛なアイデアに見えるかもしれませんが、門前町に必要な宗教的要素がこの部分にも当てはまります。

では、何の美術館にするのがふさわしいかということですが、私は下浦康瑞画伯のヒマラヤの山岳絵画の美術館を提案いたします。

美術ロードには、神戸登山研修所がありますし、

この神戸には、明治42年（1909年）西本願寺第22世の大谷光瑞師が六甲山の山麓に「二楽荘」という別邸をもっていました。

インドや、中国の仏跡調査の大谷探検隊の資料は、この神戸で整理研究されていました。

私は、インドで生まれた仏教が、ヒマラヤ山脈を越えて広がっていったそのスケールの大きさを神戸の人々に知っていただくためヒマラヤの絵画美術館が大谷探検隊の業績を伝えるためには、必要不可欠だと考えています。仏教美術というテーマと現代絵画のテーマが違うところを融合させる新しい感性を感じていただけたらと思っています。お寺と絵画が常にもあったことは歴史が証明しています。大谷光瑞師も下浦康瑞先生も共に同じ光景を夢に見ていたと私は思います。仏教美術は昔のものという時代の概念を打ち破り、今でも、仏教美術は生み出されていると私は考えています。

下浦康瑞先生の山岳絵画は、インドのタゴールと岡倉天心の交流100年を記念してインド政府の招きで二か月展覧会がございました。

また、イタリアのアマディーによります、21世紀の作家大賞を30000点の作品の中から先生の作品が選ばれました。

日本では下浦康瑞先生は、有名ではありませんが、国際的な評価を受けた先生です。国際都市を目指す神戸に相応しい作家だと確信しています。万博のインド館にも展示する計画がありました。（インド館の工事が伸びてしまったこと、ガス引火騒ぎがあり撤退）

先生は山一筋のテーマを持ち、先生の芸術は言語が違って、感性で感じていただける芸術です。インドやネパールの人から見るとヒマラヤは神様そのものです。

その高い精神性を海外は評価しています。日本で知っている人が少ないのが不思議なくらいです。神戸から、是非、下浦先生の作品の素晴らしさを伝える美術館を建てていただきたいと思っています。イベントスペース、納骨堂、下浦康瑞美術館の三つをセットにすると、

永く永続する施設になり、人々の精神文化に役立つと思っております。

今回の提言は、長いスパンで町に人を呼び込むための仕掛けについて、解説いたしました。美術館があるから、人が来るという考え方をさらに強化するためには、お客が主役になれるということを実感できる場が作れるかどうかです。

経費の面で、旗や、看板、アドバルーン的なアイキャッチな飾り付けに落ち着くかもしれません。ポップな印象のベンチも町の個性を出すのに有効ですが、それらによって、心から出かけようというパッションに結びつくか？

と今一度考えねばなりません。なぜ門前町が今でも栄えているか？その秘密を考えて、参考にしないと、一時的に栄えても、人が来なくなるたびに危機を感じ、どこからかアイデアをもって来ては試してみても、時間が経つと陳腐化させてしまう。この繰り返しになると考えます。

お客さんが、主役になっていると実感できる、お祭りや、縁日のようなうきうきとした、活動ができる場をミュージアムロードの中ほどに設ける重要性を感じます。

コストがかかりますが、それ以外に人の心をつかむことは難しいと考えます。

広い空間を確保するのが、今すぐには、現実的ではないかもしれません。長い時間をかけて用意する指針は必要です。

この来客の心を、主人公にしたイベントへの取り組みはこの地域の美術館も模索しておられると思います。その中に来客を主人公にしたイベントが用意できているか？館の目的に縛られて、身動きが取れなくなっていないかと今一度足元を見つめていただきたいと思っています。これからの高齢化の時代を迎え、インフレで生活コストが上がる中、余裕を失って、文化を愛する心をしぼませてしまっはなりません。文化が衰退する時が、国家の危機です。多くの人に愛されてこそその美術です。

一つの例ですが、伊丹ミュージアムではジュエリーと酒の器を交互に公募展で世界中から作品を募集しています。これも、お客を主人公にする活動です。

愛されるような町を作るのは、道の飾り付けではありません。もっとハートのなかに思いを巡らせないと、中身のないミュージアムロードになりかねません。

行きたいと思わせる、主人公はお客様。そういう視点が今こそ求められています。